

人間を映す 鏡としての恐怖

茂木健一郎

(脳科学者)

キングのホラー小説はなぜ、多くの人に読まれているのか。非言語的にしか知覚されない気配や予感といったものの描き方が巧みだと脳科学者の茂木健一郎は語る。キング作品における恐怖の普遍性を脳科学から読み解く。

小説家志望の男ジャックが誰もいないはずのホテルのバーで酒を飲むシーン。映画『シャイニング』より。
©Allstar/amanaimages



私は実は怖いものが苦手である。

特に、単純に怖いものではなく、心の奥底に忍びこんでくるような怖いものが苦手だ。魂の芯を震撼させるような怖いものは、積極的に求めるといってもどちらかというのを避けてきた。

だから、私とステイヴン・キングとの出会いは全くの偶然だった。

実家の前のスペースに、地元の映画館のポスターを頼まれて掲出していたことから、毎月割引券とタダ券がもらえていた。

それで、月に一回、映画館で最新作を鑑賞していた。当時は二本立てで、今考えると贅沢な話である。

この作品を観るために行こうというのではなく、いわば「定期券」だから、関心がなかった作品に時に不意打ちされることもある。

映画『キャリー』も、そのようにして「油断」して観てしまった。そして、深く強くやられた。日本公開は一九七七年、私が中学生の時である。

映画の『キャリー』には、思春期ならではの危うさと生命力が溢れていた。虐げられるものが、その内にたくわえていく暴力的なパワーが印象的な作品だった。ラストシーンまで油断ができない、感情のジェットコースターに乗るような映画だった。

しかし、不思議なほど、観た後に嫌な感じが残らなかった。むしろ、人間というものの可能性を改めて感じさせるような、そんな後味だったのである。

『キャリー』の原作者がステイヴン・キングであり、著者として初めてとなる同名の長編小説が出版されたのが映画を観た少し前の一九七四年だったということをはっきりと認識したのは、ずっと後のことになる。

なぜホラーなのか

キングがホラー小説を生涯の仕事にしようとするきっかけは、兄と一緒に屋根裏部屋で父の残した本を漁っていた時、偶然に手にした怪奇小説の先駆者、ハワード・フィリップス・ラヴクラフトの短篇小説集を手にしたことだという。その瞬間、キングは、これこそが私の魂の「故郷」だと感じたのだという。そして、抱いた感覚は、キングがおじさんとりんごの枝を持つて水脈のありかを「ダウジング」で探り当てようとしていた時の感覚に似ていたのだという。

キングというホラー小説の大家の出発点が「ダウジング」に似たインスピレーションにあったということは興味深い。

脳のさまざまな認知プロセスの中で、最も射程が長いのは「志向性」である。ある努力の方向を探り当てること。そしてそれを志すこと。キングのその後の作家としての長い活動の基礎が、この「屋根裏でのダウジング」にあったことは意義深い。相対性理論で物理学の世界に革命をもたらしたアルベルト・アインシュタインが宇宙の神秘に興味を持ったきっかけが、子どもの頃に父親がプレゼントしてくれた方位磁針がいつも同じ方向を指していることに感銘を

受けたことだったというエピソードを思い出す。キングは、「作家というものは一日四、五時間、二〇〇〇ワードは書き続けなければならない」と言っている。いわゆる「一万時間の法則」はある分野でのエキスパートになるためには一万時間それを続けなければならないという経験則である。キングのペースで書き続けられれば、六、七年で達人の域に達することになる。

継続こそ力なり。キングの脳が数々の傑作を生み出したのは、スタート時の志向性の強さと、その後の長き努力を考えれば当然のことだった。キングのホラー小説に対する志向性は、強靱で揺るぎないものだった。『キャリー』『呪われた町』に続く三作目の長編として『シャイニング』を書こうとした時、版元であるダブルデイの担当編集者は「ホラー小説の作家という色がついてしまう」と反対したのだという。それに對して、キングは、その忠告をむしろ「褒め言葉」だと受け止めたのだという。

日本でもそうだが、あるジャンル小説の作家とみなされてしまうと、文学の世界では軽く見られたり、偏った評価を受けてしまうリスクがある。ダブルデイの編集者は、そこを心配して、キングに対して愛のある忠告をしたのだろうか。それに対して、キングが「ホラー小説の作